



1. 明治42年頃の岡崎文吉



2. 上空から見た石狩川生振捷水路

原始河川の治水における自然主義

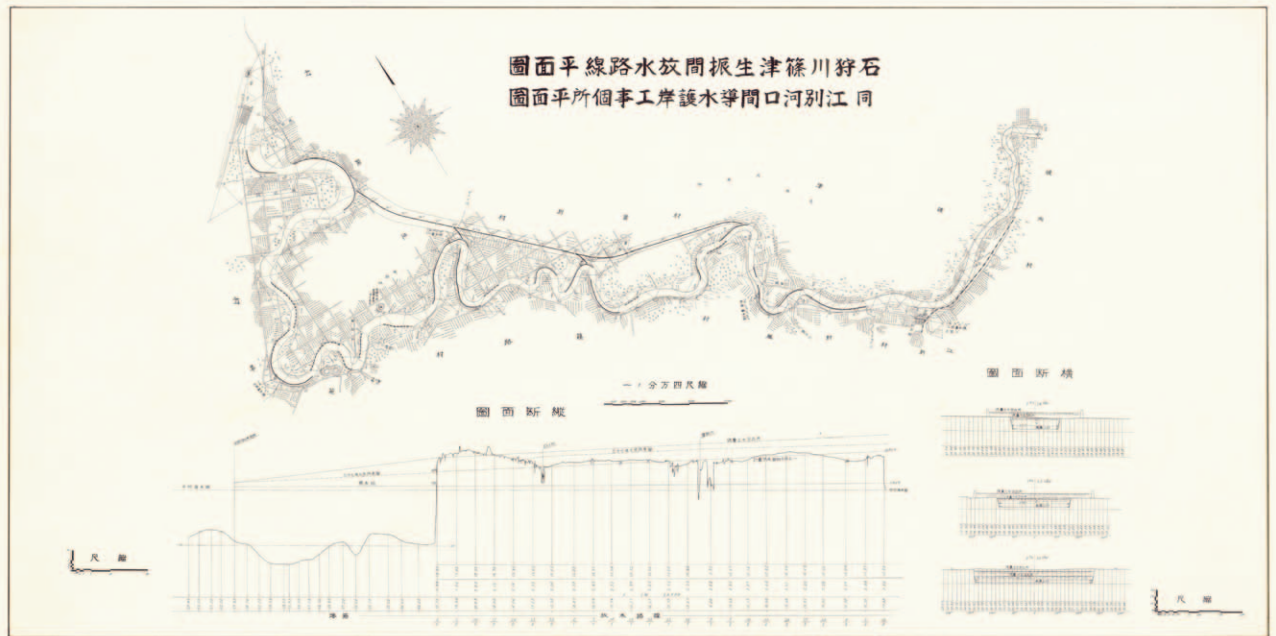
岡崎文吉は自らの治水を「自然主義」と呼んだ。対して、川を直線的に矯正し人間に都合よく改変するのを「極端主義」とした。川が何百年かけて流れてきた天然の流路が安定しているのであれば自然のままの姿にしておき、人間は不安定で決壊しそうな箇所を強化してやればよい、そのように岡崎は考えた。

開拓初期、石狩川流域では川を行き来する舟による輸送をしていた。道路そして鉄道もまだ無い、さらに冬は雪に閉ざされる未開の大地では、川は開拓民の命を支える交易路であった。一方で、蛇のように曲がりくねったその流域は大湿地帯で、氾濫で常にめかるんだ土地では農耕ができなかった。この両者を同時に解決するのが排水運河事業で、岡崎は札幌農学校を出てすぐ、これに当たっていた。

しかし明治31(1898)年9月に未曾有の大洪水が発生、石狩平野は海と化し、岡崎がつくりあげた運河も旭川まで延伸したばかりの鉄道も、壊滅的な被害を受けた。北海道庁は石狩川の治水に本腰を入れて取り組むこととし、人の手が入らず原始のままであった石狩川を、若干27歳の岡崎に委ねたのである。

明治35(1902)年に1年間の海外視察についた岡崎はアメリカのミシシッピー川やドイツのライン川等の大河を見聞し、その成果を「欧米治水調査復命書」にまとめた。そこでローヌ川の捷水路方式に批判的な立場をとる一方、アメリカのミシシッピー川の蛇行を活かした治水に共感している。こうして明治42(1909)年『石狩川治水調査報文』が北海道庁長官に提出された。通常時は河川が持つ天然の良好な断面や湾曲を維持して船の航路のために利用し、洪水時にはその水量のみ分流する放水路を建設して氾濫を起こさせず流下させるという2つの河道の案であった。翌年、石狩川治水事務所が開設され、護岸工事から治水事業を開始した。

しかしこの放水路案は、大正6(1917)年『石狩川治水事業施工報文』において1つの河道を用いる捷水路案に、岡崎の手で変更されるのである。(原口証人)



3. 岡崎文吉による放水路案(石狩川藤津(しのつ)生振間放水路線平面図)



4. 設計変更された捷水路案(対雁(ついで)生振間改修工事設計平面図)